

「つなぐ」船の科学館の試み

船の科学館 学芸課 課長代理 杉嶋 貴司

1. はじめに

船の科学館は、一般、特に次世代を担う青少年に海事思想や海事科学を普及啓発するため、「臨海副都心」という言葉や周辺の建物、さらには住所も無かった東京港の埋立て地に、昭和49年（1974）7月20日海の記念日に開館しました。

以後、昭和54年（1979）5月に初代南極観測船“宗谷”の一般公開、平成8年（1996）3月には青函連絡船“羊蹄丸”をフローティングパビリオンとして一般公開を行い、多数のお客様にご来館いただき、造船、海運その他の海事に関する科学知識について、一般国民特に青少年に対しその啓発を図ってきましたが、開館から37年が経過し、施設と展示、特に本館の老朽化が著しく、リニューアルについて検討を重ねていたところ、折からの地震もあって平成23年6月の理事会において、来館者の安全と今後の経営環境を勘案し、本館展示の休止と青函連絡船“羊蹄丸”の展示公開終了が決定されました。

現在は、リニューアル準備のため本館展示を休止し、南極観測船“宗谷”と屋外にありました売店を展示場に改装した「MINI 展示場」という形での博物館活動と、「海と船の企画展」への支援、巡回展の開催事業、博物館情報ネットワークの構築を目的とした、「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク事業」を柱とした海事科学知識の普及啓発活動を行っています。

本日は、「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク活動」事業の紹介をとおして、様々な形の「連携・ネットワーク」についてご紹介いたします。また、青函連絡船“羊蹄丸”がこの新居浜の地で最後の一般公開がおこなわれたご縁もあり、“羊蹄丸”の譲渡等についてもお話しさせていただきます。

2. 「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク活動」事業について

1) 「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク活動」事業とは

この事業は、学校教育では、海や船のことを学び知る機会がほとんどなく、船の科学館一施設だけでは、全国的で効果的な海洋思想の普及、海洋教育の推進には限界があり、各地の社会教育施設である博物館を拠点とした企画展の開催等で海洋教育の推進を多面的全国的になるようにするという目的で活動しています。「海と船の企画展」への支援、「海と船の巡回展」の開催事業、博物館相互の交流を深める博物館の情報ネットワークの構築・推進事業等を行っ

ております。

本事業の大きな柱である「海と船の企画展」への支援は、日本財団の助成事業として平成12年（2000）に始まり、平成18年（2006）からは、公益法人等が設置する館を日本財団が、国公立、私立博物館等を船の科学館が担当しています。船の科学館では、海や船、川、湖沼に係る企画展へ開催総経費の80%を上限に支援を行っています。現状の企画展支援対象費目は、資料運搬費、制作費、印刷費となっています。

巡回展の開催事業は、平成19年度（2007）から海や船をテーマとした「海と船の巡回展」パッケージを海洋政策研究財団との連携で「海のトリビア」に基づいて開発し、全国の博物館、資料館等を対象として貸出・運営を行っています。

全展示アイテム10種類×1セットで始まりましたが、翌年、人気の高い7種類×1セットを追加し、さらにその翌年にはより人気の高い6種類×1セットの巡回展アイテムを追加しました。現在、これら3セットを用意しています。

アイテムの内容は、以下のとおりです。

<p>01 ウンチでつながった不思議な関係 『海のトイレット』</p> <p>海に関連した様々なウンチのはなしをトイレ型の展示什器とモバイル型グラフィックにて展開したアイテム。トイレ什器の中の様々なところから海のウンチの秘密を探り出すことができます。</p>	<p>06 実物大にびっくり！ 『海の生きものせ〜くらべ』</p> <p>海の大動物たちの大きさを等身大のロールスクリーングラフィックで体験することのできるアイテム。また、その全長や壊れたトリビアネタを海の生きものメジャーで楽しみながら確認することができます。</p>
<p>02 魚の不思議映像満載 『海のぎょ！シアター』</p> <p>普段見ることのできない海の生きものたちの映像をミニシアターで展開するアイテム。個々の映像内容をイラストでより分かりやすく解説します。</p>	<p>07 疑似体験してみよう 『イルカトーク』</p> <p>イルカの音響定位システムであるエコーケーションについて知ってもらいながら、イルカの交信を疑似体験することのできる展示アイテム。噴気孔から音を超音波に変換して、発射するメロン器や受信器となるトアゴの紹介を行う。利用者はイルカに成り代わって交信しながら、イルカの特長能力をマイクと骨伝導装置（振動で音が聞き取れる装置）にて疑似体験できます。</p>
<p>03 いろんな不思議をつくってみよう 『海のクラフト工房』</p> <p>紙やハリガネを使った海の実験グッズのワークテーブル。空を飛ぶことが出来る魚たち（トビイカ、トビウオetc.）の紙飛行機をつくり、飛ばしたり、ハリガネでつくったウミアメンボを水に浮かべたりすることで、遊びながらその特殊能力を知ることができます。</p>	<p>08 この子だれの子 『親子をさがせ！』</p> <p>子どもの時は、親と似ても似つかない姿をしている海の生き物、結構たくさんいます。親の写真と子どもの写真を見て、どれとどれが親子なのか、パズル形式で探し当てていくアイテムです。親子の組合せが見つかったら、更にその親子の秘密のメッセージが現れます。</p>
<p>04 マンボウさんまい 『マンボウテーブル』</p> <p>謎が多いマンボウの生態や特徴を『パズル』や『隠れ引き出し』などで楽しく学ぶことができるマンボウづくりのワークショップテーブル。マンボウの成長過程や一度に産む卵の量など様々なマンボウの秘密を体験的に知ることができます。</p>	<p>09 人生は温度まかせ 『ウミガメオス・メス スマートボール』</p> <p>暖かい砂だとメス、冷たい砂だとオスになる確率が高くなるウミガメの卵。卵を産み落とす砂の温度が変わると、産まれてくる子どものオス・メスの確率も変わることがゲーム型の装置で楽しく理解してもらうことができます。</p>
<p>05 へい、いらっしやい！新鮮な泳ぎのネタばかり 『泳ぎの回転寿司』</p> <p>さまざまな海の生き物の泳ぎに関する面白ネタばかりを扱っているお寿司屋さん型アイテム。様々な生き物泳ぎ方比較を視覚的にみることが出来るほか、泳ぎネタ寿司で楽しみながら泳ぎの秘密を知ることができます。</p>	<p>こんな船、見たことある？ 10 『進化する船たち』</p> <p>ひとくちに船といっても、小さなカヌーから巨大なタンカーまで、その種類は数え切れません。中には、見たことも聞いたこともないような珍しい船も。ちょっと珍しい船を集めて、不思議なちゃぶちゃぶボックスの中で浮かぶ船型とグラフィック解説で紹介します。</p>

2) 船の科学館・海と船の博物館ネットワーク研修会の開催

船の科学館では、「館と館」「モノとモノ」「人と人」等のネットワーク構築と更なる事業発展を目指して「海と船の博物館ネットワーク研修会」を平成21年度（2009）、平成22年度（2010）に行いました。毎年開催する予定でございましたが、船の科学館の本館展示の休止により、現在は開催を見合わせております。

第1回目となる平成21年度(2009)のネットワーク研修会は、博学連携をテーマに、全国の博物館関係者と学校教員を対象にした『「第3回博学連携ワークショップ」～博物館が教室になる～』をあわせて開催しました。

ネットワーク研修会では、この事業を活用していただいた館の事例発表、参加者を専門分野別に地域問わず6名程度の班に分けて、「海と船の博物館ネットワーク」に関する班別討論及び発表、「海と船の博物館ネットワークのあるべき姿」と題した講演を実施しました。

博学連携ワークショップでは、博学連携事例紹介、各分野別の「博学連携を目的とした班別ワークショップの実施と発表、文科省の教科調査官をお招きして「学校教育における海洋教育の現状と今後～博物館の有効活用～」と題した講演を行いました。

第2回目の開催となる平成22年度(2010)のネットワーク研修会は、地域内での博物館連携を模索し、現状支援中心の活動からより広いネットワーク活動の模索とともに、仲間意識を醸成して顔の見えるネットワーク構築などを目的としました。

この事業を活用していただいた館の事例発表、ワークショップ、講演、「海と船の企画展」成果展示会として、先に秋田県にかほ市で開催された白瀬南極探検隊記念館主催の企画展『南極の氷に挑んだ日本の船—木造汽帆船「開南丸」と歴代南極観測船—』をこの研修会にあわせて一定期間船の科学館で巡回企画展として開催し、見学会を行いました。

ワークショップは、「博物館同士の連携を考える」と題し、参加館に「船の科学館・海と船のネットワーク」の活用を意識していただく内容としました。グループ分けを、専門分野を問わず、参加者を地域ごとにグループ化し、その中で海・船に関する展示や事業の自己紹介を行い、グループ毎に「ネットワーク」を活用した「海・船」に関する共同事業の企画書等を作成し発表していただきました。

3) 連携の事例紹介

① 白瀬南極探検隊記念館(秋田県にかほ市)

平成22年(2010)、白瀬艦を探検隊長とする日本南極探検隊が明治43年(1910)に東京芝浦ふ頭を出港して100周年を迎えることを記念し、『しらせ日本南極探検100周年特別企画展 南極の氷に挑んだ日本の船—木造汽帆船「開南丸」と歴代南極観測船—』を平成22年(2010)11月2日～平成23年(2011)1月16日まで開催されました。期間中の来場者は対前年比112%増加となる1,582人となりました。

企画展開催前には、砕氷艦“しらせ”が秋田港寄港時に開催されたイベント「しらせ・南極フェスタ」とあわせて秋田港ポートタワーとの合同企画展「白瀬としらせ企画展」を行い企画展の事前告知をされています。

船の科学館にて平成23年(2011)1月22日～2月27日までこの企画展が開催され、13,191人もの来場者を数えました。私ども船の科学館は、この企画展にあわせ、講談師宝井梅福氏の講談「白瀬艦一代記」を開催いたしました。

また、早稲田大学校友会設立125周年を記念して、「白瀬・南極100年展」秋田県内巡回

展を大仙市（2月5日～6日）、由利本荘市（2月12日～13日）、能代市（2月26日～2月27日）の3か所で開催、来場者は、三会場合計で1,000人を数えました。加えて、本企画展は、東京の早稲田大学大隈記念タワーで「南極100年」として3月25日～5月21日の期間で開催されました。来場者は807人となりました。

② 萩博物館（山口県萩市）

平成16年（2004）に開館した萩博物館は、開館から平成18年（2006）までは歴史文化を中心とした企画展を開催されてきました。平成19年（2007）に私どもの支援を活用した、竜宮城という「海」をテーマとした企画展を開催し、家族層獲得に成功され、58日間の開催期間中の入場者合計26,408人、対前年比170%となり、最多記録を更新されました。その後、平成21年（2009）から毎年ご活用いただき、平成21年（2009）は59日間合計32,565人（最多記録更新）、対前年比108%、平成22年（2010）は、65日間合計67,769人（最多記録更新）、対前年比208%、平成23年（2011）は、目標3万人に対して65日間計40,730人の来場者を迎えられました。平成24年（2012）は、最多記録の更新とはなりませんでしたが、目標入場者3万5千人に対して65日間合計66,597人の来場者を迎えられました。

成功の要因として、さまざまな世代の興味を惹くテーマ設定、さまざまな広報宣伝を戦略的かつ徹底的に実施、臨場感あふれる展示会場づくりの三項目を挙げられています。

特に広報関係において、支援を活用して大量のチラシ（8万枚）を作成し、県内すべての市町だけでなく、萩市に隣接する島根県益田市、津和野町の教育委員会の協力を得て全学校の児童にチラシを配布し、企画展の認知度をあげたことが成功の大きな要因と分析されています。ちなみに、アンケートでは、企画展を知るきっかけとなった割合は、「ポスター・チラシ」が55.8%を占めているとのことでした。

③ 西南学院大学博物館（福岡県福岡市）

平成22年度（2010）、平成23年度（2011）は単独で開催されましたが、神戸大学海事博物館と行った平成24年度（2012）の企画展資料借用交渉をきっかけに、共同巡回展開催の話が持ち上がり、結果、大学博物館共同企画シリーズ「閉ざされた島 開かれた海—鎖国の中の日本」と題し、西南学院大学博物館（6月2日～8月4日）と神戸大学海事博物館（11月7日～12月7日）で開催されました。

平成25年度（2013）の企画展においても、企画展終了後、借用した資料を返却する際に企画展の展示ツール一式を合わせて送り、資料借用先でも企画展を開催するという巡回企画展を計画されるなど、積極的に連携推進を図られています。

4) まとめ

海洋教育の推進や海洋思想の普及といった大きな目標を掲げても、1つの博物館だけの活動では限界があります。

海・船・河川・湖沼を扱うことが前提となりますが、船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

ク事業をとおして、微力ながら皆さまの「連携」構築のお手伝いをさせていただき所存でございます。

今後は、支援館の種類拡大、共同企画展の開催や企画展の一体化への取り組み、さらには、日本のみならず世界の博物館との連携、博物館だけではなく、海洋関係の学校や施設等も含めた幅広い活動を行い、海洋に関する人材育成、人的ネットワークを構築することを大きな目標として活動を進めてまいります。

毎年9月ごろに、次年度の募集要項をホームページに掲載いたします。

海や船、河川・湖沼を扱ったことがない博物館も是非ご活用をご検討ください。ご検討いただくことも「連携」への第一歩と考えています。

3. “羊蹄丸” について

1) “羊蹄丸” とは

この船の名前はご存じなくとも、津軽海峡や青函連絡船という名前はご存じかと思います。津軽海峡や青函連絡船は、文学、音楽などの世界でいろいろ取り上げられてきました。一例をあげますと、文学作品では、石川啄木の歌集『一握の砂』に収められた「忘れがたき人々」のなかで、「船に酔ひてやさしくなれる いもうとの眼見ゆ 津軽の海を思へば」と詠んでいます。また、音楽では、石川さゆり『津軽海峡冬景色』北島三郎『函館の女』といった、日本的な哀愁を帯びた歌謡曲である演歌を中心に取り上げられてきました。

青函連絡船は、青森～函館間の約113kmを結ぶ津軽海峡を横断する航路で人や鉄道貨物を運び、明治、大正、昭和にかけて、本州と北海道をつなぐ大動脈として活躍していましたが、青函トンネル開通とともに、昭和63年（1988）3月その歴史的な役割を終えました。

“羊蹄丸”は、この航路で昭和40年（1965）8月から昭和63年（1988）3月まで22年7か月余り活躍し、青函連絡船最後の上り旅客便となった船です。

昭和63年（1988）7月、船の科学館が取得し、平成4年（1992）にイタリア・ジェノバで開催された「国際海と船の博覧会」へ日本政府のパビリオンとして見学者約70万人を迎えたのち、フローティングパビリオンとして平成8年（1996）3月より船の科学館前面海域で一般公開を開始いたしました。“羊蹄丸”船内の展示の中では、とりわけ2年にわたる現地取材を行い、当時を知る人々へのインタビューや写真、資料を基に、昭和30年代の青森駅前の朝市や駅舎、青函連絡船の世界を再現した「青函ワールド」が好評を博しました。

2) “羊蹄丸” 展示公開の中止と譲渡先決定

“羊蹄丸”の展示公開中止が決定したときから、“羊蹄丸”をどのようにするのか、具体的には、①国内外の希望者へ売却、②解撤という大きな2つの道筋がありましたが、①の国内外への希望者への売却も②解撤も、どちらの方法を選ぶにせよ、いくら巨大とはいえ博物館

資料であったものを通常の船舶と同じような処分方法でよいのかという議論がついてまわりました。そこで、“羊蹄丸”の活用を広く一般公募し、最も優れた提案者に対し“羊蹄丸”を無償で譲渡することとし、平成23年(2011)7月30日に「青函連絡船“羊蹄丸”の無償譲渡について」と題したプレス発表を行いました。

問い合わせ件数51件、最終的に11団体から国内外で様々な活用方法を提案いただきました。その中から「新居浜市制75周年、新居浜高専設立50周年事業として一般公開の後、産官学連携によるシッパーサイクル研究に供する」という提案をされた、ここ愛媛県新居浜市で活動されている産官学連携組織のえひめ東予シッパーサイクル研究会を“羊蹄丸”無償譲渡先として選定いたしました。

現在、多くの大型船舶の解撤は、人件費の安い途上国において、劣悪な作業環境の中、人海戦術により行われ、毎年多数の犠牲者がでています。また、廃油、PCB、フロンガス、水銀、鉛、アスベストといった有害物質の対策もなされていません。途上国の国民の生命と豊かな自然環境を犠牲にして最終処理をしていることとなります。このような現状を改善するために、バーゼル条約の精神に則り国際的なシッパーサイクル条約が採択されました。シッパーサイクル条約が発効すると、原則として自国で利用した船は、自国での解撤が義務付けられることとなります。えひめ東予シッパーサイクル研究会からの提案はこの動きを見据え、安全でクリーンな先進国型シッパーサイクルシステムの確立と新たな産業の創出を目的に羊蹄丸を活用しようというものだったのです。

3) 新居浜での一般公開

平成23年(2011)11月8日の“羊蹄丸”無償譲渡先決定を受け、えひめ東予シッパーサイクル研究会は、曳航や係留のための各種手続きを行い、平成24年3月25日、新居浜へと向け曳航、同月29日に無事新居浜東港へ到着、予定通り4月27日から6月10日まで新居浜市、新居浜高専、えひめ東予シッパーサイクル研究会からなる、新居浜市制施行75周年記念 新居浜高専創立50周年記念「羊蹄丸一般公開」実行委員会によって一般公開が行われました。

一般公開前、営業に関して関係者の心配が2つありました。一つは来場者の船内の案内の問題、もう一つが青函連絡船と“羊蹄丸”の知名度の問題です。

船内の案内の問題は、船の科学館“羊蹄丸”でボランティア活動をされていた方のうち青函連絡船船長経験者のN氏を含む4名がボランティアに名乗りを上げ、参加されたことと、新居浜の関係者に、青函連絡船に詳しい方がいないという話を聞いた青函連絡船船長経験者のN氏が、「宇高連絡船の乗組員は、研修で青函連絡船



に乗船した。高松近辺に知り合いがいるからボランティアに参加しないか声をかけてみる。」
 といって声をかけられ、宇高連絡船OBの方によるボランティアが実現したことなどで解決
 しました。

知名度の問題は、新居浜市教育委員会と主要マスコミ各社から後援をとり、徹底的なメ
 ディア露出と新居浜市内の小中学校を通して生徒・児童へ招待券を配布するなどして、知名度の
 向上に尽力されました。

結果、目標有料入場者3万人に対し、公開期間半ばの5月20日に目標を突破した後は、
 5月27日に4万人、6月7日に5万人、そして最終日に目標の倍の人数である6万人を超
 え、最終的に61,096名を迎え、大好評のうちに“羊蹄丸”最後の一般公開が終了しました。
 新居浜市、新居浜高専の周年事業として、地域の活性化、マスメディアへの露出による知名
 度の向上等、大きな成果をあげられました。

“羊蹄丸”は、その後新居浜を離れ、香川県多度津の地でシブプリサイクル研究の用に供
 されました。

4) 羊蹄丸内の資料について

船内の大型展示物である「青函ワールド」、DD10形ディーゼル機関車、スハフ44形客車
 は廃棄処分とならずに展示保存されることとなりました。

① ディーゼル機関車・客車

“羊蹄丸”青函ワールド内に展示しておりました客車は、当初船内からの取り出しが困難
 とされていましたが、関係者の尽力の結果、“羊蹄丸”の一般公開終了後、新居浜にて搬出
 に成功しました。

鉄道ファンの間でその資料的な価値が高く評価されている客車は、栃木県真岡市の真岡鉄
 道へ引き取られ、今春真岡駅に隣接して開業する予定の「SLミュージアム（仮称）」に展示
 されます。また、機関車は千葉県いすみ市の観光施設にて展示公開されています。

② 青函ワールド

「青函ワールド」を青森へという署名活動を行った市民の熱意を受けた青森市の積極的な
 働きかけに対して、新居浜市が応えた結果、“羊蹄丸”内の「青函ワールド」が八甲田丸に
 譲渡されました。

また、この譲渡がきっかけで、新居浜市と青森市は、災害時応援協定を平成24年（2012）
 10月17日に締結されました。以下、青森市の発表です。

愛媛県新居浜市と災害時応援協定を締結（新居浜市役所）【10月17日】

本市では、大規模災害に対する即応力の強化を図り、地方公共団体間の広域支援や広域
 避難といった相互応援を円滑に行うため、このたび、愛媛県新居浜市と災害時応援協定を
 締結しました。新居浜市とは、現在「八甲田丸」内に展示している青函ワールドを譲渡い
 ただいた縁で、鹿内市長が新居浜市役所を訪問、佐々木新居浜市長と協定書を取り交わし
 となりました。

5) まとめ

新居浜における“羊蹄丸”最後の一般公開と船内の資料の行方についてお話させていただき、“羊蹄丸”譲渡先である新居浜の産学官連携やボランティアの人的なつながり、地方自治体の連携について紹介させていただきました。

新居浜での“羊蹄丸”最後の一般公開の成功と、“羊蹄丸”内にあった大型展示物が各地で継続的に保存公開されることとなったのは、えひめ東予シップリサイクル研究会と船の科学館とのご縁からはじまる様々なつながりの成果といえるでしょう。

4. まとめ

今回の研究発表大会のテーマは「全科協の40年とこれから—全科協の活性化に向けて—」ということで、様々な形の「連携・ネットワーク」によって成功を収めた事例についてご紹介しました。

これらは、一口に連携という言葉でまとめることが出来ますが、連携するきっかけやその対象の広さ、深さが様々です。

今後は、全科協に加盟する博物館とのより強固な連携は勿論のこと、異なった専門分野の博物館や全くの異業種との連携がますます重要となるのではないのでしょうか。

末筆になりましたが、皆さまの益々のご発展を祈念いたしまして発表を終わります。